黄昏のワルキューレ
～～～耽辱の戦乙女～～～
小説 狩野 景
挿絵 助三郎
二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第一章　ヴァルハラの戦女神　006
第二章　反逆のジークフリート　061
第三章　囚われの戦女神　121
第四章　黄昏の悦堕　177

登場人物紹介

Characters

フレイア

神族と魔族の間に生まれた半神半魔の女神で、天界の城ヴァルハラに戦乙女として仕える。

エルルーン

巨人族とのハーフの戦女神。フレイアと共にワルキューレとなった幼馴染み。

ジークフリート

戦神。ヴァルハラの戦士長を務めるが、その地位に満足できずにいる。

ブリュンヒルデ

戦女神でありながらジークフリートに心酔し、その部下として戦う。

ファーゾルト

巨人族の血を引く戦神。ジークフリートに賛同して行動を共にする部下。

『第二章　反逆のジークフリート』より

道路の舗装を抉り返す勢いで藻掻くが、シックスナインの体位で、手足の関節部を押さえつけてのし掛かるが巨人はびくともしない。抉るように腰を上下させ、唇をいっぱいにこじ開ける極太の怒張を間断なく出し入れしながら、ファーゾルトは青黒い舌に唾液を溢れさせて小柄な戦女神の下半身を執拗に舐め回す。

「き、貴様ッ!!　エルルーンからっ、離れろっ！」

自分への陵辱以上に怒りを沸き立たせ怒鳴りつけるが、狂戦士は冷笑にて返答する。

「意地汚い娘ねぇ。折角お友達が楽しんでるのに、横取りしようとしちゃって」

「なっ！　ち、違う……」

別に狂戦士の薄汚いペニスが欲しいわけではない。妙な邪推をされ、むきになって否定しようとした時、指先についたフレイアの愛液を行儀悪く舐め啜り、ブリュンヒルデが宙にルーンの呪文を綴った。

その途端、触手の蠢きが更に活発さを増す。

いままでは胸当てに収まりきらぬ膨らみの裾野を、くすぐったく這いまさぐっていた数本が、青く染められた革製のカップを押し上げて潜り込んでくる。

「ひうっ!?」

ふやけて鋭敏になった肌に絡みつく腐肉のぶよぶよした感触に息が詰まった。たわわな巨房にくるくると触手が巻きついてくる。

（な、なに……っ⁉　そんなッ……）
ドクドクと胸の鼓動が凝縮され、柔球を圧迫される感触に震え戦く。汗染みで蒼の色が濃くなった胸当てが歪に盛り上がりモコモコと左右バラバラに蠢いている。ギュンと激しく乳房が絞り上げられるとともに、触手の先端がくわっと口を開けてフレイアの硬くそそり立った乳首へ噛みついた。
「――ッァッ！」
灼熱が圧搾された乳房の内側で凝縮され、極細の熱線となって脳髄を直撃した。
逃れようとするとびくともしない戒めが、歓喜に跳ね広がる脚を遮ろうとせず、はしたなくMの字に開帳させた。魔女に捲られたスカートを更にはだけさせ、赤茶の陰毛からその下の緩みほぐれた襞の織り成しをびしょ濡れて透けた薄布に浮かび上がらせる。
「――ひっ！　あ、あうっ、なんで……⁉」
巨房を揉み搾られながら乳首をコロコロと弄ばれる疼悦に狂おしく上体をくねらせつつ、あられもない姿勢を直そうとするが、膝裏に絡みついた触手がすでに頑強さを取り戻し許そうとしない。
「すっかり我慢できないって様子ね。じゃあ、余り焦らすのも可哀想だから、太いのくわえさせてあげる♪」
あられもない大股開きに向かって鎌首をもたげる。赤紫にてらてらとヌメる幾本もの触

手の先端が、勃起した陰茎の鏃型そっくりにぽっくり膨れあがった。
「ぬああっ！　そん、なっ!!　やめ……ろっ！」
卑猥な形状に嫌悪感を覚えるというのに、子宮が脈打ちを激しくし目を逸らすことを許してくれない。
鈴口のように開いた小穴から黄ばんだ濃厚汁を垂れ流しながら、触手はもう下着としての用を為さないほど濡れふやけた薄布の内側へと潜り込んできた。
「ツッ!!　あ、ぁああっ！　だ、ダメッ!!」
鼠蹊部をぬりぬりとくすぐられながら、綻び開いてしまった大陰唇の外周を亀頭状に尖った先端でなぞられる。
（あうっ！　ん、くう……っ!!　――だ、だめだ……あそこ……閉じ、られないっ！）
ゆるゆるに広がった膣を引き締めようと括約筋に力を込めるが、痙攣を伴った収縮を起こして愛液を溢れさせるだけで、すぐにまただらしなく緩んでしまう。
（こ、こんなものに……私の初めて……奪われるのかっ！　くっ――!!）
潤んだ瞳を落ち着きなく泳がせ、絶望の色を湛えた表情で唇を半開きにする。その様子にブリュンヒルデがゾクゾクと身を震わせ、愛液まみれとなったレオタードの股間をくちゅくちゅと悩ましく鳴らす。
「あはぁ……この屍肉ちんぽでオンナにしてあげてもいいけど、あんたみたいに意地っ張

りな娘はこっちの方が面白そうだわぁ」
魔女の言葉がどういう意味なのか理解が及ばない。ただ秘唇をぬちゅぬちゅと押し広げつつあった肉蔦がそれ以上女陰に潜り込んで来ようとしない。
なにかあると思っていてもつい、安堵してしまったその時、鼠蹊部へと後退した数本が一気に股間を這い滑って、張りがある臀部の双房を押し開いた。
「あうっ！　まさ……かっ‼　やっ、やめ……っ！」
肛門にズンと重い衝撃が走り、腰が唐突な落下感に見舞われる。弾けるような灼熱が腹腔にまで迫り上がり、意識が数秒白一色に染められた。
股を伝って尻谷に溜まっていた愛液が潤滑を発揮する。硬く窄まった菊皺を無理矢理にこじ開けられ、毒蛇のように尖った触手亀頭がにゅるんと、肛門にめり込んできてしまった。
――ぬぶっ‼　ズブズブブッ！　ぬぶんっ‼
全意識が尻穴へと集められてしまう。準備も整わない排泄の筒襞を脈動する極太が遠慮なく刮げながら突き進んでくる。尾骨から脳天へと直撃する振動が、腹腔をも重々しく響かせ気が変になってしまいそうだ。
魔女のせせら笑う眼差しと固唾を飲む人々の凝視が股間をざわめかせ、耐え難い恥辱を巻き起こす。

「あっ、ああっ！　はんんっ!!　イ、イャッ！」
ズッ、ズズッ、と小刻みに埋まり込んでくる極太に直腸が灼熱と化し、アナルの異物感を何倍にも苦しくさせる。大きく開いた金色の瞳から大粒の涙を零し、か細い悲鳴をくぐもらせながら紅の髪を振り乱す。
「だっ……あぐぅううううっんんっ!!」
触手の搾乳に拉げる巨房をゆさゆさと揺らしながら、反り返った背筋を痙攣させる。
（はうっ、あぁあッ!!　お、お尻なんかにっ！　こ、こんな……ッ!!　ふっ、ううっ、ぁあああっ！）
腰がぞわぞわと浮き上がるような落ち着かぬ感触に身体が反応し、排泄しようと息んでしまう。だが触手はその抵抗をものともせず、強靭な弾力を持つ幹の太さを増しながら、ずぶずぶと直腸いっぱいにめり込んだ。
「うわあ、すごいわ！　奥まで一気に入っちゃったじゃない。こっちの穴も初めてみたいだけど、さすが魔族との混血だけあって、そういう風にできてるのね」
ブリュンヒルデのはしゃぐ声を切っ掛けに直腸を満たす剛直蔦が激しいピストンを繰り出した。
「――ち、ちがう、これっ……触手がっ!!　ひふぁああっ！　そん……な、強くッッ、はわぁああっ!!」

『第四章　黄昏の悦堕』より　その１

鼻孔をツンと差す澱んだ潮水のような生臭さに目眩を覚えて喘ぐ。激しい怒りを抱いていても、散々に淫靡な姿を見せつけられ、男としての本能が否応なしに彼の男根を勃起させてしまっていた。かなりな極太が反り返って天を突くように屹立している。

「く、ふぁあぁ……こ、これ、すごく太いかもぉっ！　んはぁ、貧弱な人間の逞しいちんぽぉ‼　ふはぁ、これ、私、貰う……人間ちんぽ、わたしの、だからぁあっ！」

もう目の色が尋常ではなかった。いくら誘っても犯そうとしてくれない臆病な人間族の男根、しかも大当たりともいえる極太な剛直を手に入れて、編み上げの胸鎧から巨房を弾け出さんばかりにたわたわと跳ね暴れさせフレイアがはしゃぐ。

「このっ‼　い、色ぼけ女神っ！　誰がお前なんかに、俺のをッ‼」

亡き妻に操を立てているのだろう。勃起はどうにもならぬが、これ以上薄汚い堕女神などに触らせるものかと男が藻掻き続ける。だがそれも、人の能力を凌駕するヴァルハラの住人には無駄なことだった。荒い鼻息とともにはしたなく涎を垂れ零しながら、フレイアは鎧の下で恥垢に汚れた極太に色惚けた美貌を寄せると、酸味と塩辛さが刺激的に入り混じった味わいに陶然としながら口腔の奥へ迎え入れる。

ぬちゅ、ぐじゅぶっ！　んぐむっ‼　むじゅっ、ぬぷ、むぬぬぬぬっ！

亀頭の先が口蓋を刮げながら埋まってくる。窄めた舌で雁首の溝を穿ると幹全体がビクビクと痙攣して暴れ回り、ほっぺたを内側からぽこぽこと膨らませた。鋼の芯が通ってい

るかのように硬い癖に節くれ立った幹の表面は妙な弾力を有していて、唇を窄めて絞り上げると、脈打ちながら押し返してくる。

「くふぁああっ！　や、やめろっ!!　離せっ！　咥えるな……ッ!!　つはぁあっ！」

いくら藻掻こうとも、天上界の住人にガッチリと押さえ込まれた両脚は人間の力ではびくとも動かせない。

女神に陰茎をしゃぶられる歓喜に懸命に抗いながら男がわめくのを意に介さず、熱を放つ先っぽの鏃型を執拗に舐め回すと、こびりついた垢汚れが刮げられ唾液に溶け混じって噎せ返るような生臭い風味が口いっぱいに広がる。

「んむぐうっ！　ぷぶぁああっ!!」

その刺激的な濁汁を平然と飲み下し、情欲の戦女神は根元まで頬張った肉勃起を窄めた唇で扱くように、顔を上下させ始めた。

ちゅぶっ！　ぬちゅっ!!　ぬうずずっ！　ぶじゅるっ!!　ぐじゅっ、じゅずじゅずっ！

カウパーと唾液が止めどなく滲み出て、啜り込みながら舌を竿幹へと絡めてしゃぶる。脈動する剛直に口蓋や頬を擦られながら、吐き気を催す寸前まで喉の奥へと迎え入れ、口腔全体で圧迫しながら根元から先端まで扱き出すように一気に抜き絞ると、男の身体が引き攣ったように波打ち勃起の太さと長さが更に増す。

「あ、ん……ふぁあっ、おちんふぉ、ふごいっ！　口いっはい、顎ぉ、はぶれひゃうっ!!

ふぁあう、濃い汁ぅ、たっぷり溢えへ、んはぁ、お腹たっふいぃいっ！　んふうっ!!」
赤く長い髪を波打たせて目一杯開いた唇から極太い勃起肉を出し入れし、悩ましい喜悦の声をくぐもらせる。
じゅるるるうっ！　じゅぶずずっ!!　ぐぴゅっじゅぽずぴゅぴゅっ！
溢れる涎とカウパーの量は増すばかりで、下品な音色を響かせて吸い上げる間隔が短くなってゆく。
「す、すげえ……女神の癖に、あんな美味そうにちんぽしゃぶってやがる……」
「あ、あいつも、いやがってた癖に、あんな気持ちよさそうなツラしやがってっ!!」
取り巻いて見詰める男たちの嘲りに、羨ましそうな調子が混ざり始めた。気がつけば何人かは、下履きからペニスを取り出して自分の手で弄り慰めている。
綻び始めた彼らの心を更に惑わして、フレイアの舌がちゅぷ、ちゃぷ、と勃起肉を丹念に舐め回し淫靡な音色を響かせる。
根元から先端まで満遍なく舌を這わせ味わったが、やはりエラを張って先端を尖らせた亀頭のしゃぶり心地が最高だった。括れた溝を刮げなぞり、裏筋を駆け上って鈴口を掘り返すようにチロチロとくすぐってちゅ～と蕎麦を食すように吸い上げると、生意気に逆らい続ける男が気持ちよすぎてのたうち回る。
男根を口いっぱい頬張ってますます情欲が狂おしく煮えたぎる。尻を突き出して開帳し

た緩みっぱなしの女陰から、腰が脈打つ度に発情蜜の塊が間歇泉のように、びゅぶっ！べじゅぶっ!!　と噴き溢れて放物線を描き飛び散っていた。尻房の狭間でも鳶色の濃さを増した菊皺がうねうねと蠢いて開閉を繰り返し、腸液の雫を垂れ零している有様だ。

「――んふぅ、く、口じゃ、もうらめ……。もっと、きもひいいふぉこ、挿入ゆ……」

ぬばぁあ、と唾液の糸を引いて、極太が唇から抜き出される。散々心地よくされながらも、中途半端で止められてしまって不満げに脈打つ勃起幹は怒ったように青筋を浮き出させて、脈打ちを繰り返す。口に頬張られる前より一回り以上は大きさを増した剛直。急角度に反り返って天を指すその直上へと、媚びた喘ぎを荒くする戦女神が膝立ちで躙る。

「が、はぁあ……や、めろ……この淫乱悪魔……ッ！」

舌技に散々弄ばれ息も絶え絶えになりながら男が気丈に罵るが、憐れにも陰茎は牡としての本能に従って勃起し続ける。

雫を溢して脈打つ肉勃起のその上からだらだらと締まりない愛液を降り注ぎ、まとわりつくスカートの裾を口の端で咥えて捲り上げワルキューレが狙いを定める。

「やっと、ちんぽぉ、おま○こに、挿入ちゃえるぅ……。ふ、ああ、はぁあぁんっ！」

期待に胸を打ち震わせ、鼻血でも噴き出しそうな様子で顔を真っ赤に上気させる。溢れ出る涎で、口の端に咥えたスカートに液染みを増やしつつフレイアは腰を沈めた。

「――はわぁあはぁああっ！　んぬぁあああっ!!　はうっ、来るッ、膣内ぁ、あ、あぁ

ああ、挿入って、来るぅはぁあああぁっ！」
　むじゅっ！　と花弁を押し開いて亀頭が膣口にはまり込んだ瞬間、意識が飛びかけた。両脚が萎えへなへなと崩れ落ちる勢いで、発情に緩みきった膣内へと極太が埋まり来る。
　――ぬぶうっ！　むちゅむちゅにゅちゅぅ――っ!!　ぶずっ、ぬぶっ！　ぬずずっ!!
　濁液を絡めて狭穴いっぱいに埋まった剛直の、ゴツゴツした幹肌に壁襞を擦られて膣穴が収縮を繰り返す。その度に奥へと進み来る男根との密着が窮屈さを増して、股間から身体が溶けて崩れてゆくような快感が膨れあがる。奥底に達した先端が子宮を突き上げた衝撃に、もう一度意識を失いかけてゼイゼイと危うげに息を乱す。
「くふうっ！　はわぁあっ!!　んうっ！　あぁっ、はふぁぁあぁっ!!　んひぁあぁっ！　ひうっ!!　くっ――――はぁあぁぁっ！　はうんっ!!　んへはぁあぁ――ッ！」
　もどかしくてどうにかなりそうなほどに疼いていた女陰の穴が太く硬いもので占められてゆく喜びに、涙が溢れてしまう。
「く……そぉ！　う、ごくなぁっ!!　や、やめ……んううっ！　くはぁっ!!」
　陵辱される悔しさに男が呻くその声を耳にして、サディスティックな興奮に背筋を戦慄かせ、フレイアはあられもなく嬌声を迸らせながら捩れる腰を大胆に上下させ始めた。
「おわぁ……つ、ついに自分からおま○こに入れちまったぞっ!!」
「め、女神の癖にスケベに腰動かし始めた……。太いのずっぽりくわえ込んでるっ！」

見守る男たちは相変わらず侮蔑を浴びせかけるが、その口調は羨ましそうな響きを宿している。よく見れば彼ら全員が人間の男を犯す堕落した女神の浅ましい行為に欲情して、股間でいきり立った怒張を弄り慰めていた。

男たちが一斉に先走る液濁の生臭い匂いに朦朧となる。正気であったなら、吐き気を催したであろうその異臭も、いまはなによりも悩ましく情欲を掻き立てる。そしてそれは、半身に神族以外の血を宿らせた魔王の眷属（けんぞく）たちも同様であった。

「あはぁ、素敵だわぁ。人間とはいえ、これだけの男たちがいっぺんにおちんちん扱くから、すごい匂いでどうにかなりそう。こんなことさせちゃうだなんて、頼もしい後輩だわ〜」

はち切れそうな爆乳を自分の手で乱暴に弄びながら、かつては戦女神であった褐色の魔女が歓喜する。

「うむ。さすがはオーディンが自慢する、戦乙女一の使い手だけのことはあるな。その魅惑で奴の夜伽（よとぎ）も務めたか？」

上機嫌に邪悪な笑みを浮かべ、神軍一の使い手と恐れられた男が、正気であったなら一笑に付してやったであろう邪推を巡らせて問う。

彼らの嘲笑も、もはや膣奥の疼きに比べれば取るに足らないことであった。ブリュンヒルデを真似て自分で乳房を揉み拉げ、胸当ての隙間から指を差し込んで、固く充血した乳

首を転がしながら、腰をグラインドさせて膣全体で極太の感触を得ようと蠢く。
――ぐっじゅっ！　べじゅっ!!　のちゃっ！　むぶじゅっ!!　ぬちぃぁあっ！　ぐぶじゅっ!!　ずちゅっ！　ぐっじゅ、ぐっじゅっ、ぶじゅっ!!　びぶじゅぶじゅっ！
滲み出る愛液が膣内で捏ねられ粘度を増して泡立つ。糸を引いて粘り着くその摩擦が、極太と穴襞が擦れあう刺激を高めて、下腹から背筋へと熱い波を遡らせる。
「ふぁあ、人間ちんぽっ！　いっぱい擦れるっ!!　気持ちいいっ！　人間のくせに、ちんぽ硬いぃいっ!!　ひぁああ、イイッ！」
もう誇り高く恥じらいを知る戦乙女の、行儀のよさは跡形もない。照れる素振りすら見せず男性器の名称を声高くわめき散らし、濃度を増して白濁した愛液の飛沫を散らしながら男を組み敷いて腰を振る。
「くふぁあああっ！　奥うっ!!　硬いのコンコン当たっちゃってるうっ！　ひぁあ、息ぃ詰まるっ!!　き、気持ち、よすぎて、息、止まっちゃ……んくはぁあっ！」
深くまでめり込む怒張に子宮が圧迫され気持ちよいと、ぐっと腰を迫り出して、目一杯に入りきったところから更に奥までペニスをめり込ませようと無理をする。
「あふぅう、おま〇こだけじゃ、た、足りないぃっ！　お尻ィッ!!　お尻にも欲しぃいいっ！　だ、誰かぁ!!　お尻、目一杯おちんぽ、挿入てぇえっ！　くふ……ぁあっ!!」
ついに膣の刺激だけでは物足りなくなり、アナルにも挿入を求めて人間の男たちに媚び

た色目を投げかけて誘う。
「お、俺たちに、ケツ犯してもらいたがってるぞ……」
「正真正銘の変態女神め。身体中の穴全部にちんぽ欲しがって駄々捏ねそうだなっ！」
だが、淫靡な光景に興奮はしていても、危険な女欲情神に近づこうという者はいない。下手にちょっかいを出せば、初めに憤って突っかかったためにいまでもペニスをヴァギナへとくわえ込まれ慰み者にされている男と、同じ境遇が待ち受けていそうだ。
誰もアナルを犯してくれる者はいないと知るや、フレイアは一瞬泣き出しそうに眉根を寄せると、自分の指で菊襞を掻き分けて肛門へと指を突き入れる。
「――がぁ、ふぁああっ！　くひぃ、いぃいいいっ!!」
ヴァギナよりも窮屈で、入れられる感触も心地よいというよりは切羽詰まったような居心地の悪さが勝っている。それでも、ひたすら意識が焦点を失って浮き上がってしまうような膣の快感とは違った喜悦が、尻穴の内側に膨れあがった。
「おわっ！　自分で指入れちゃったよっ!!　ケ、ケツにっ！」
「しかもおま○このちんぽは全然放す気ないみたいだ……。す、すげっ、いっぺんにグチュグチュ掻き回してるっ！　前と、後ろの、あ、穴ぁああっ!!」
罵る声がすると、わざわざそちらに異物で満たされた二つの穴を向けて見せつけてやる。
「おま○こぉ、太いのいっぱいっ挿入られてるの、気持ちぃいっ！　お、お尻ぃ、も、挿

入ってると、気持ち……よくて、た、たまらないっ!!　ふぁ、はぁあぁぁっ！」
　いままで肉欲に悩まされながら必死に耐えていた自分が、馬鹿に思える。こんなに気持ちがいいと知っていたなら、宿屋の少年のペニスも挿入させてしまえばよかったし、他にもいっぱい男のちんぽを膣にもアナルにもいつも挿入させておけばよかった。
　止まることなく腰を振りたくり、勃起した男の極太でヴァギナの深いところを抉り返す。びちゃびちゃと潤んだ音を高鳴らせて、真新しい飛沫が蠢く股間から飛び散った。
「うひぁあぁぁはぁあっ！　おま○こ気持ちイィッ!!　お、お前も、私のおま○こ入れて、ちんぽっ、イイ……だろう……？　ふぁ、あぁあぁぁっ！」
　無理矢理に押し倒して挿入を強要した相手へと、今度は感想を押しつけて勝手に盛り上がる。男の顔が屈辱に歪みながらしかし勃起を抑えることもできず、強引なヴァギナにされるがままになっている。
　無力な人間のその様に、魔族そのものの高圧的な笑みを満面に浮かべ、ゾクゾクと背筋を戦慄かせながら、フレイアは指を突っ込んで押し広げたアナルをもう一度取り囲む男たちに見せつけた。
「そ、そんなに、ちんぽいっぱいあるのにぃっ！　じ、自分で、弄ってるだけ……なんて、ば、バカぁ？　ほらあ、挿入(いれ)ていい穴、あるんだから、いらっしゃいよっ!!　お、おま○こも……すぐ、イクから……。くふぁあぁっ！　はうっ!!　んはぁあぁっ！」

生唾を飲み込み、戦女神の誘いに乗るべきか戸惑っている人間たちを挑発する。自分の淫らなその言葉に酔いしれるように興奮を昂ぶらせ、フレイアの腰の動きが激化した。

「――!!　く、くはぁあっ！　や、やめろおっ!!　この淫乱女神ッ！」

波打つ膣襞で勢いよく怒張を扱く女陰のストロークに男の声が切羽詰まった。

だが拒まれれば拒まれるほど、相手を屈服させたい欲望がムズムズと湧き上がってしまう。いまならジークフリートやブリュンヒルデたちがなぜあれほどに人間を虐げるのかが理解できる。

「ほらっ！　ほらぁあっ!!　き、気持ちイイッ、でしょおっ!?　私ぃ、こんな、気持ちいいんだからあっ!!　ちんぽ深いところ、コンコンきて、おかしくなっちゃいそうっ！　お、お前も、私のま〇こで、イッちゃいなさいっ!!　ふぁあっ！　はううっんっ!!」

女神の命令に従ったかのように、膣内の剛直が硬さを増して脈打ちを激しくした。その刺激に集中しようと、アナルから指をにゅぽん、と小気味よい液音を響かせて抜き放つ。

――ぬぶっ、ぬぶぬぶぬぶぬぶっ！　ズブッズブッ!!　ぐじゅぶじゅぬちぬちぬちぬちっ！　ずむんっ、ずむんっ!!　ずぶっ！　ズボズボズボズボッ!!　ブズッ、ブズッ！

陰茎の硬さを貪るようにフレイアは腰を不規則に捩らせて、上下運動を夢中で繰り広げる。蠢く襞が絶え間なく方向を変えて捲り返され、愛液の分泌が止まらない。息つく暇もないほど続けざまに子宮を弾かれて、下腹が重い痺れに苛まれ続けている。

「くふぁああっ！　あふうっ!!　んひぁああっ！　あ、あぁああっ!!　膣内ぁあ、イイっ！　はぁあ、ひぃいっ!!　だ、め、もうっ！　こんなの……飛んじゃうッ!!　ひぃあぁああっ！　ふはぁうううううっ!!　つはぁ――――ッ！　はぁああっ!!」

悶え震える肢体に粘り着く男たちの視線から戸惑いが薄れ、本気の情欲を注ぎ始め女の本能を脅かしてくる。彼らみんなに犯されてしまうかもしれないという危うさにゾクゾクと背筋が粟立つなか、締まりっぱなしのヴァギナの中で怒張が急激に大きさを増し、ビクビクン、と激しく痙攣した。

「――ひ、へぁはぁあっ!?」

「く……くそぉおおおっ！」

ただごとではない前触れに息を詰まらせるなか、されるがままになっていた男が恨みがましい憤りの呻きを振り絞る。その途端、熱い奔流が膣内に溢れかえった。

――どびゅううっ！　ずびゅっ!!　びょぼぼぼぼっ！　びゅぶゅ!!　ぶびゅんっ、びゅるっ！　びゅぶばぁああぁ――――ッ!!

子宮を圧迫しながら沸騰させる熱濁の勢いに、意識が突き上げられる。

「くぁああっ！　ひぃいいっ!!　ひゅごぃいっ！　はぁああうっ!!　こん、なぁあっ！　人間ちんぽ、の、くせにぃいっ!!　ふぁは、い、イクっ！　はふぁぁあああっ!!　ひぃいあぁああはぁああぁ――――ッ！」

『第四章　黄昏の悦堕』より　その２

その反応が更に男たちを煽ってしまい、ちゅばちゅばと唇を押し当てて吸い上げられ、全身にキスマークの紅色が刻まれてしまう。

「くひぁっ、ひょんな、吸っひゃ……んひぅうっ！」

脇腹から背筋から、舌と手のひらが無遠慮に這い回る。

跳ね揺れる巨房には争うように何人もの指が群がり、類い希なる柔らかさを味わおうと夢中で捏ねてくる。

「絶品だな、この乳ッ！　こ、こんな柔らかいのいままで揉んだことないぞっ‼」

美麗な釣り鐘型が淫らに揉み拉げられ、それだけでも乳腺が切ない疼きで湧き上がってくるのに、疼痛を伴って硬直してしまった乳首をつねられてしまった。

「――きひはぁあっ‼　ふぉんにゃ、乱暴しなひれ……。ふ、ぁああ……ハァんぅううっ！」

指先で熱心に転がされると切迫的な悦感に脳裏が焼かれ、視界が真っ白に染まってしまう。息苦しいほどの悩ましさに背筋が痙攣するなか、波打って震える尻の桃房も男たちの快楽に飢えた手に弄ばれる。

しっかりとした肉感的な房をむんずと掴まれ、大胆に捏ね揺さぶられると菊穴に頬張った剛直の感触を一層はっきりと味わわされてしまう。

（ひっ……あぁあぁ……お尻ぃ、挿入ってるの、にッ！　ふ、ぁああ、キ、キツくされた

ら……ッ!!）

直腸を刮げられる際どい快楽に追いつめられ身が竦むなか、別の男に臍を掘り弄って腹部を撫で回されると、心地よくて啜り泣くような喘ぎが零れ出てしまう。

ぼさぼさに乱れた紅色の髪にまで指先が潜り込み、無遠慮に触り心地を堪能する。守るべき人間たちから責められる虚しさで胸が締めつけられる思いだというのに、戦衣の生地を捏ね乱し無秩序に肌をまさぐってくる愛撫へと魅惑を感じてしまう。

「ひぁはわぁあああっ！　き、きひいいっ!!　おま〇こぉ、イイッ！　おひりも、嬉ひいからああっ!!　はうううっ！　もっほ、メヒャメヒャひへええっ!!」

薄紙のような理性で必死に堪え続けた快楽への自制が、人間たちからの刺激によって消し飛ばされた。

膣と菊穴へ交互にピストンされるストロークを、自分からも腰をくねらせて迎えてしまう。

――ぱぶんっ！　ブズブジュベバブッ!!　ぐぶじゅっ！　ズパンズパンブバンッ!!　ぶっじゅばぁあっ！

「ひゅわんっ！　はわっ、はわぁあああっ!!　んはあっ！　はうぁああっ!!　奥ぅう、イイッ！」

男に馬乗りになったままで、膝立ちに腰を持ち上げるが、ぼどぼどと大量の雫を垂らす

双穴に快感が走ると虚ろな眼差しで身震いし、すぐへたり込んでしまう。
子宮と腸奥を勢いよく弾かれ白目を剥いて硬直するが、口に含んだ宿敵の勃起は放れようとしない。
「うふぅん、立派なこと言ってたくせに、おちんこ独り占めで悦んじゃってぇ。あたしなんかよりよっぽど淫乱だわあ～。んふぁぁぁあっ‼」
そう言いながら、フレイアへの愛撫からもあぶれた男たちをすべて引き受けて、褐色の魔女が歓喜に喘ぐ。
「ひ、ひがふぅうっ！　わはひ、お前なんかふぉ……。――ふぁふううんっ‼　イ、イィイィ――ッ！」
堕落魔女に嘲られ憤るのだが、膣と直腸の狭間で硬剛直が圧迫し合うと激しい身震いで嬉しがってしまう。
「ふわぁぁぁ……お、お乳ぃ、それ、だ……はふぅ、よく、なっひゃ……んふぁぁぁっ‼」
その勢いで弾み揺れるたわわな乳房も、僅かにへばりついた胸当ての蒼布を捲られて幾本もの指に揉み捏ねられ、桃色に火照った張りのある柔房を歪に拉げる。
「ふぁぁっ‼　フ、レイアァ……、ボ、ボクが……捕まっちゃった、か、らぁ……ごめ、ん……」

――ぶずんっ!!　にゅぶるっ！　ぐじゅずぶっ!!
「はわっ！　奥ぅだめぇっ!!　やあ、イッちゃうっ！」
絶え間ない淫行に弱々しく悦楽してしまう紅髪の戦女神の姿に、朦朧とした意識を振り絞ってエルルーンが詫びた。己の単独行動がこの事態を招いたという罪悪感を抱いているのだろう、大きな瞳いっぱいに涙を浮かべる。だが、ファーゾルトの極太に子宮を圧迫され、魔女の膣収縮に肥大陰核を絞られると、すぐに呆気なく悩ましい嬌声を張り上げてしまう。
ブリュンヒルデの尻の下でくねってしまう仰向けの小柄な身体も、人間たちの愛撫に弄ばれる。
「魔女の生肌も気持ちいいけど、ちっちゃい戦女神様もぷよぷよのふわふわで、たまらねえっ！」
白の縁取りをした赤い胸当てが殆どはだけ、少々小振りな膨らみがフレイアの巨乳同様捏ね回されて美麗な形を無惨に拉げていた。
「ふあ……!?　エ、ル……ッ!!　――はわあっ!?」
親友の詫びに気にするなと返そうとする。すべては己の未熟が招いたことだ。だが膣壁を唐突に押し広げて膨張する極太の感触に驚愕の声を上擦らせる。
同時に直腸の中でも極太な竿が太さを増して、ただでさえ窮屈な襞筒をキツキツに張り

詰めさせる。
「ひゅわっ!?　は、あぁっ！　な、な……に、やあっ!!　だっめぇっ、強……いっ、はわぁあああっ！」
――ぬぶっ！　ずぼずぼずぼぼっ!!　ぱずんっ、すばんっ！　ずぶずぶずぶっ、じゅぶずぶずずぶっ!!
いきなり壊れた機械のようにストロークが勢いを増し、滅茶苦茶に両穴を奥深くまで突きまくられる。
（な……んな、のぉ、これ……ッ？　はうっ、だめぇ、飛んじゃううっ！）
問答無用で目の前が真っ白に染められ、乱雑な悦感に背筋が痙攣してしまう。嬉しさの込み上げない過剰な快感の押しつけに意識が弾けそうになった刹那、
「ふおああっ！　で、出るううっ!!」
フレイアの前後穴を貪っていた男たちが、声を揃えて吠える。彼らの全身が硬直して跳ね上がり、ズンムッ！　と穴底を極太が叩く。
――ぶぼぁああっ！　どじゅっ!!　びゅるびゅるびゅぷぅううっ！　びゅぷびゅぷびゅぷっ、ぶぴゃっ!!　びゅばっ、ぼびゅばぁああぁあっ！
刹那、決壊した濁流の勢いで夥しい量の精液が、膣と直腸の両方へとぶちまけられた。
「ばふぉあっ！　くはぁうっ!!　あぶぅううっ！　やぁああっ、出ちゃ……中ぁ、出され

ちゃっ……たぁああっ!!　ふぁあ！　ふぁう、はぁああうううっ!!」
尻と下腹が煮えたぎったような熱さに満たされる。膨張した肉太の圧迫に加え、勢いよく噴き出す孕ませ汁の水圧に息が詰まりそうだ。
収まりきらぬその牡液が戦慄き震える尻の前後から溢れ、白濁の飛沫をびちゃびちゃと飛び散らせる。
脱力を誘う生臭い精液臭が鼻孔を汚すなか、フレイアは荒い息を吐きながら二穴に極太をくわえ込んでへたった腰をモジモジと悶えさせていた。
（ふぁあ、人間の、だ、出されちゃったぁ……。な、なかぁ……あふぅ……、で、でも、私ぃ、まだ……）
膣とアナルを存分に穿たれて精液までぶちまけられ、たまらなく心地よい。だが、その快感がどこか中途半端であった。喜悦に意識が押し上げられ、たまらない気分なのだが昨日、ジークフリートに陵辱された時のような突き抜ける絶頂感には遠く及ばない。
「ぷはぁあ、戦女神の膣内（なか）、出しちまったぁっ！」
「女神の尻に中出し、気持ちよすぎいっ!!」
それなのに射精に満足の感想を述べながら、男たちはさっさとペニスを前後の穴から抜き出してしまう。
――べっぴゅっ!!　ぶじゅるっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/